運動部活動指導者の現状と問題点
（小中高校の比較とまとめ）
－バスケットボール部指導者への調査をもとに－

高　山　千　代

The Present Conditions and Problems Facing Sports Club Advisers
— An Analysis and Comparison among High Schools,
Lower Secondary Schools and Primary Schools Based on a
Surveyof Basketball Club Advisers —

Chiyo Takayama

は　じ　め　に

学校教育の中の運動部活動における指導者の現状と問題点について、バスケットボール部指導者への調査をもとに、第一報として高等学校について本学の研究報告第27号で報告、[1] 第二報として小学校ついて研究報告第28号で報告、[2] 第三報として中学校について研究報告第29号において報告した。[3] 新潟県はバスケット王国といわれるほどの全国でも有数のバスケットボールの活動の盛んな県であり、協会登録数としては、小学校（ミニ）では493チーム（全国一）を有し、中学校で300チーム、高等学校では200チームの登録数を有し、小学校、中学校、高等学校と、全国大会でも活躍するチームが育っている。[4] 近年の活躍では、平成８年には第26回全国中学校選抜大会で優勝・準優勝チームを出し、昨年は第53回全国高校選手権大会(インターハイ)において新潟商業高等学校が優勝を達成している。小中高校を通して種目別活動状況については、バスケットボールは他の種目に比べてかなり多数のチーム数・部員数・顧問数を示している(資料１)。[5]

第一～三報のように、バスケットボールの専門性および部活動指導経験によって、運動部の状況が影響を受けることが認められた。しかし、経験の多少とともに、指導者の取り組む姿勢によって部活動の現状は変化することが認められた。今回は、そのまとめとして、小学校、中学校、高等学校の全体の分析と、三者間の比較検討を実施し報告する。本報告が部活動指導の１資料として役立つことができれば幸いである。

方　　法

1、調査時期および調査対象

1994年11月～1995年１月

新潟県内高等学校バスケットボール部顧問（120校中98校、140人から有効回答）

新潟市内中学校バスケットボール部顧問（32校中26校、33人から有効回答）

新潟市内小学校ミニバスケットボール部顧問（59校中46校、60人から有効回答）

1997年５月～７月

新潟県内中学校バスケットボール部顧問（106校中69校、90人から有効回答）

新潟県内小学校ミニバスケットボール部顧問（117校中59校、74人から有効回答）

有効資料としては、高等学校140、中学校123、小学校144のサンプルが得られた。

合計回答率68.7％

2、調査内容

本研究者の指導経験、およびバスケットボール部指導者との面談内容をもとに、部活動指導における顧問の現状と問題点についての質問項目の作成を試みた。1994年７月三条市内小学校15校の顧問に予備調査を実施し内容を検討し質問紙の作成に至った。

この質問紙により、アンケート調査を実施した。（資料２）

結果および考察

１、Ｑ１～Ｑ52の質問項目についての因子分析結果[1)]により要因名をまとめた。（表１）

表1　項目群別要因名

項　目　群	質問項目（Ｑ１～Ｑ52）	要　因　名
指導の現状	１、２、６	積極性、充実感
	３、５	不適合感
	４、７	負担、困難感
指導の技術	９、10	知識不足
	11、12、13、14、15	研究熱心
指導の環境	16、17	学内の理解
	18、19	家庭の理解
	20、21、22	保護者の理解
部員との関係	23、24、25、27、28	信頼感
	26、29、30、31	民主性
	32、33	配慮性
部員の状況	34、35、40、41、43、44	意欲、まとまり
	36、37、38、39、42	不真面目さ
指導の言葉	46、52	配慮の言葉
	47、48、49、50、51	指導の言葉

２、フェイスシートの各項目について、小学校、中学校、高等学校の指導者について比較した。

１）年齢については、小、中学校の方が高校より、若い指導者が多い。小、中学校と高校間で有意差があった。（図２－１、表２－１－１、表２－２－２）

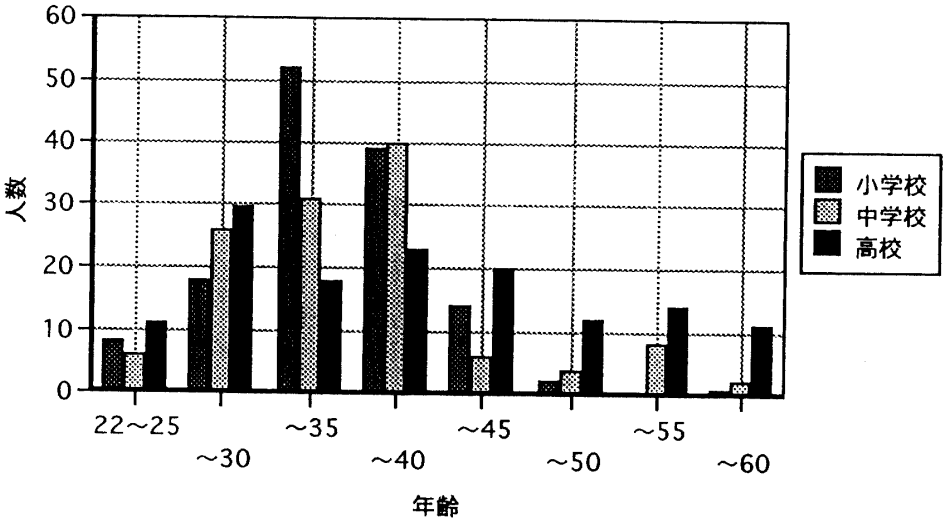

図２－１：年齢構成比較

表２－１－１

	平均値	標準偏差
小学校	33.5	5.6
中学校	34.5	7.7
高　校	37.8	10.5

表２－１－２　有意差

	平均値の差	p 値
小、中	0.998	0.3307
中、高	3.285	0.0013**
小、高	4.283	<.0001***

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

２）指導者自身のバスケット部の経験年数については、中学校の指導者、次に高校、小学校の順に高くなっており、各々の間に有意差があった。(図2－2、表2－2－1、表2－2－2)

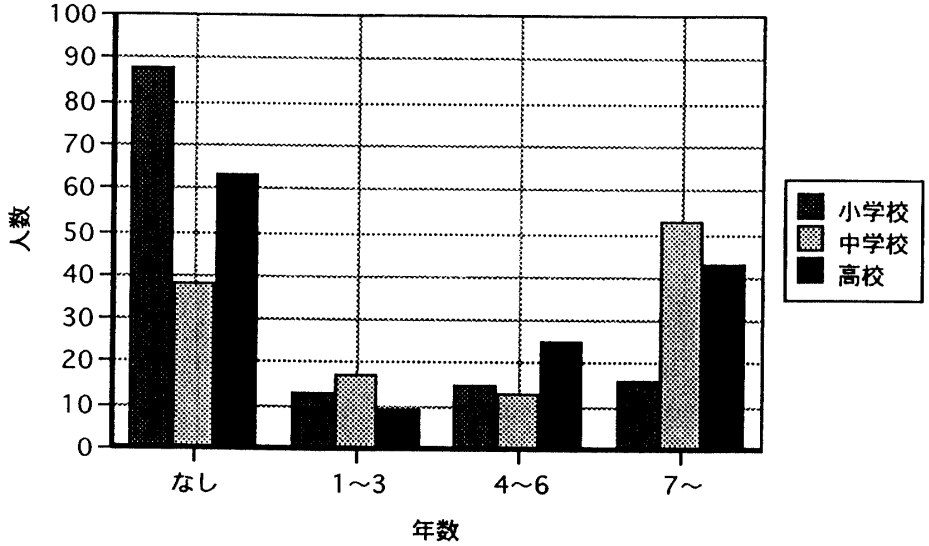

図２－２：バスケット経験年数

表２－２－１

	平均値	標準偏差
小学校	1.96	3.12
中学校	5.08	4.29
高　校	3.94	4.11

表２－２－２　有意差

	平均値の差	p 値
小、中	3.119	<0.0001***
中、高	1.146	0.0176*
小、高	1.974	<.0001***

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

3）運動部の経験については、中学校、高校、小学校の順に高くなっており、中学校と小、高の間に有意差があった。（図2－3、表2－3－1、表2－3－2）

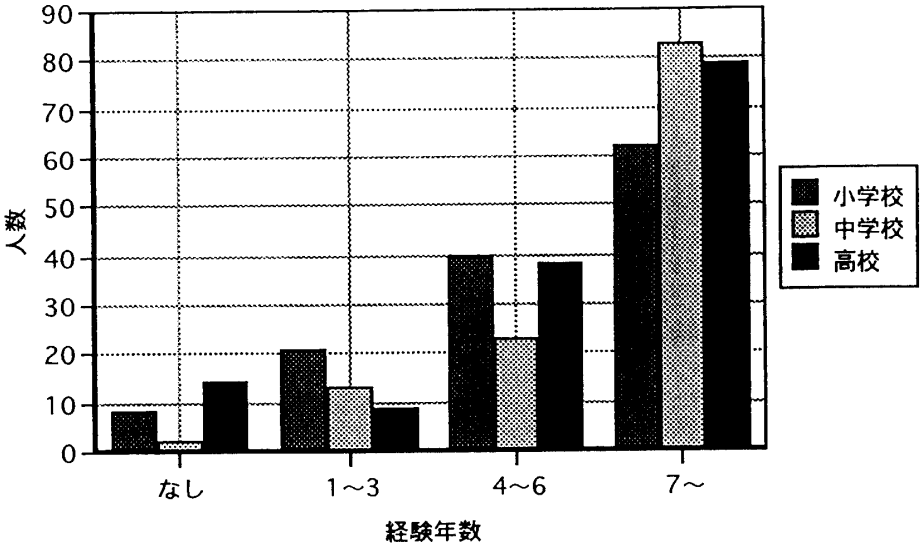

図２－３：運動部経験年数

表２－３－１

	平均値	標準偏差
小学校	6.39	3.08
中学校	7.98	2.77
高　校	6.93	3.3

表２－３－２　有意差

	平均値の差	p 値	
小、中	1.59	＜.0001***	S
中、高	1.055	0.0057**	S
小、高	0.535	0.1521	

（*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05）

4）バスケット部の指導歴については、高校、中学校、小学校の順に高くなっており、各々の間に有意差があった。（図2－4、表2－4－1、表2－4－2）

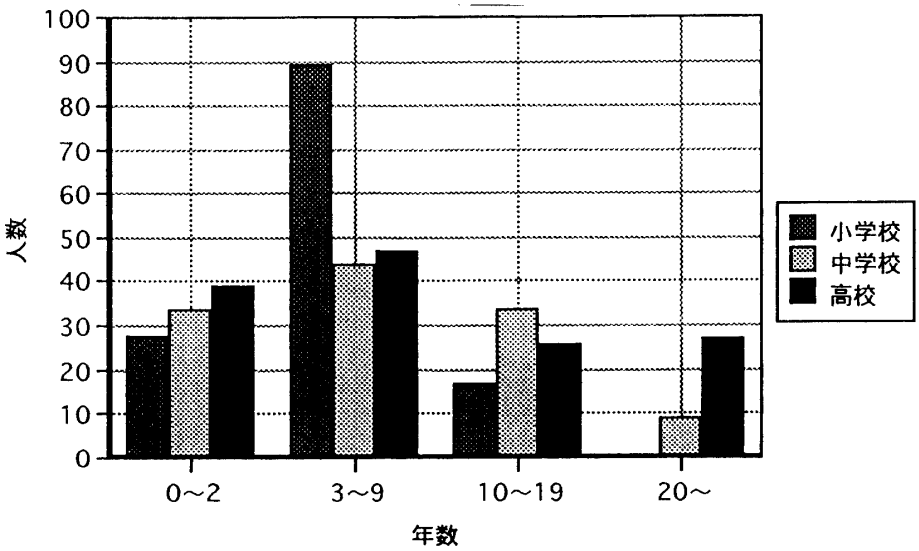

図２－４：運動部経験と指導の現状

表２－４－１

	平均値	標準偏差
小学校	5.18	3.37
中学校	7.74	6.89
高　校	9.94	9.55

表２－４－２　有意差

	平均値の差	p 値	
小、中	2.56	0.0042**	S
中、高	2.2	0.0128*	S
小、高	4.76	＜0.0001***	S

（*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05）

5）性別、男女両方を指導している、中高における体育教員の数については（表２－５）のとおりである。

表２－５

	女性／全体	男女部両方指導	中・高内体育教員
小学校	25／134	47／134	
中学校	16／123	6／123	72／123
高校	10／140	19／140	62／140

6）部活動の目標については、各々８つの目標から３つを選ばせた結果は、三者共にバスケットボールの楽しさを選択した指導者が最も多かった。以下、小学校では、技術、体力、仲間作りと続き、中学校では、勝利、精神力、社会性と続き、高校では、勝利、社会性、協力性、技術と続いている。(図2－6、表2－6)

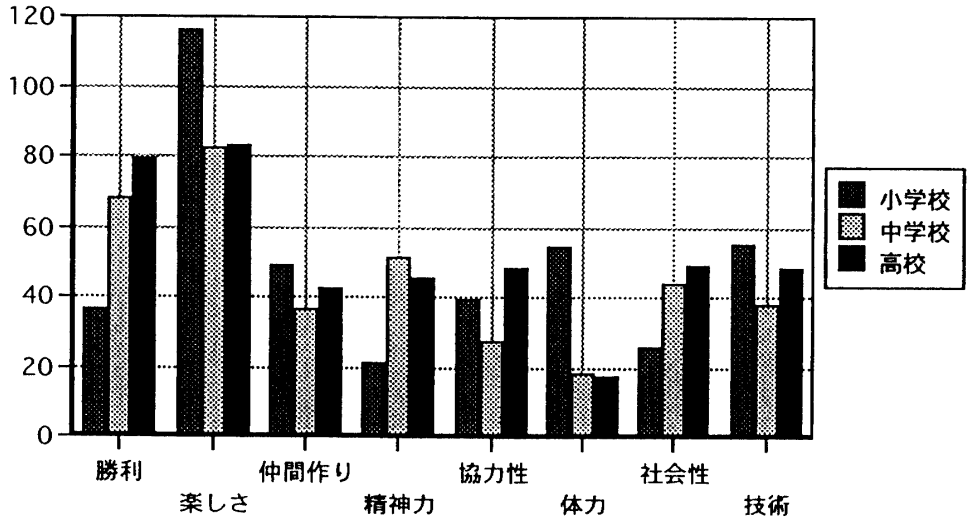

図２－６：部活動の目標

表２－６　部活動の目標と順位

	勝利	楽しさ	仲間作り	精神力	協力性	体力	社会性	技術
小学校（順位）	36（6）	116（1）	49（4）	21（8）	39（5）	54（3）	26（7）	55（2）
中学校（順位）	68（2）	82（1）	36（6）	51（3）	27（7）	18（8）	44（4）	38（5）
高校（順位）	79（2）	83（1）	42（7）	45（6）	48（4）	17（8）	49（3）	48（4）
全体（順位）	183（2）	281（1）	127（4）	117（6）	114（7）	89（8）	119（5）	141（3）

7）指導者のタイプについては、「解る－研究熱心」タイプは高、中、小の順に高い値を示し、「解る－研究不熱心」タイプは小、高、中の順、「解らない－研究熱心」タイプは中学校が高く小、高に差はない。逆に「解らない－研究不熱心」タイプは、中学校が低く小、高に差はない。又、知識不足については校種間に有意差はないが、研究熱心さにおいて三者の間に有為な差があった。(図2－7、表2－7－1、～表2－7－4)

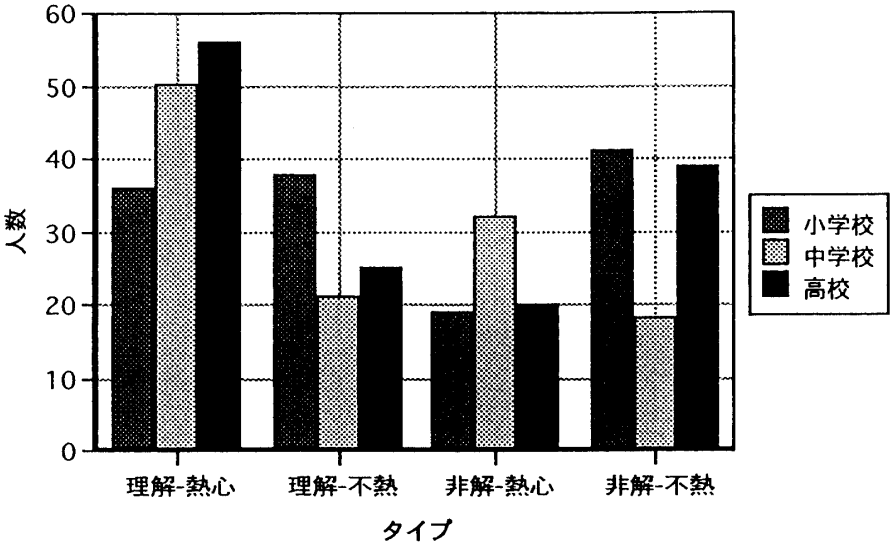

図２－７：指導者のタイプ

表２－７－１（指導技術の知識不足）

	平 均 値	標 準 偏 差
小 学 校	3.15	0.092
中 学 校	2.98	0.111
高 校	3.05	0.11

表２－７－２ 有意差

	平均値の差	p 値
小、中	0.166	0.27
中、高	0.067	0.6525
小、高	0.099	<0.4947

(*** P<0.001 ** P<0.01 * P<0.05)

表２－７－３（指導技術の研究熱心）

	平 均 値	標 準 偏 差
小 学 校	2.09	0.081
中 学 校	3.39	0.083
高 校	3.14	0.088

表２－７－４ 有意差

	平均値の差	p 値
小、中	0.484	<.0001***
中、高	0.244	0.0425*
小、高	0.24	0.0405*

(*** P<0.001 ** P<0.01 * P<0.05)

年齢については、小、中学校の場合は若い指導者が多く40歳を過ぎると激減しており、指導歴の差につながっている。中学校の指導者に、バスケット経験、運動部経験者がもっとも多く、指導者のタイプについてからも解るように、小、高校より熱心であることが認められた。しかし、このことは、発育段階による目標の捉え方の差や、小、中学校では、義務教育で地域全入制であるのに対し高校は選抜制入学であり、競技を目指すものは部活動の活発な学校に集中することも考えられるため、競技レベルや目標の捉え方に差が生じることも考えられる。

３、校種別（小学校、中学校、高等学校）指導者と、１で得た各要因間との関係（分散分析の結果の交互作用の図とFisherのPLSDによる有意水準の表は顕著なものについて、掲載する。以下の、４～６についても同様とする。）

１）指導の現状については、中学校の指導者が小、高校より、積極性、充実感を感じ不適合感および負担、困難感は少ない。（図３－１、表３－１）

２）指導の技術については、２の７）の指導者のタイプにおいて述べた。

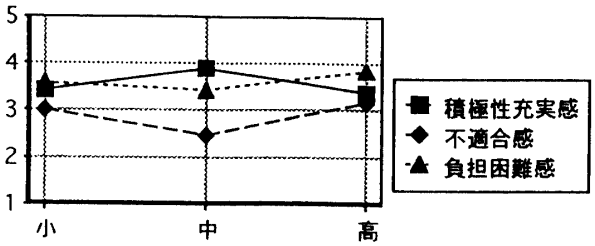

図３－１：校種別指導の現状

表３－１　校種間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：５％

	積極性充実感	不適合感	負担困難感
小、中	.0004***	.0001***	.2181
中、高	<.0001***	<.0001***	.0016**
高、小	.7133	.2523	.0474*

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

３）指導の環境については、学内の理解は中学校が高く、保護者の理解については小、中が、高校よりも有意に高い。（図３－２、表３－２）

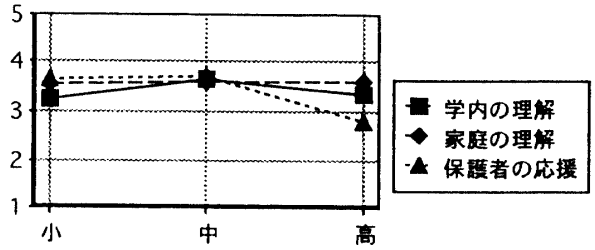

図３－２：校種別指導の環境

表３－２　校種間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：５％

	学内の理解	家庭の理解	保護者の応援
小、中	.0010**	.6377	.7543
中、高	.0169*	.7136	<.0001***
高、小	.3309	.9094	<.0001***

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

４）部員との関係については、信頼感では、小中学校が高校よりも有意に高く、民主性では高校が小中学校よりも有意に高く、配慮性は三者とも高い値を示している。（図３－３、表３－３）

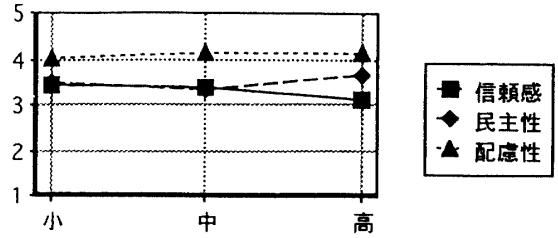

図３－３：校種別部員との関係

表３－３　校種間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：５％

	信頼感	民主性	配慮性
小、中	.6520	.0802	.2750
中、高	.0010**	.0002***	.8857
高、小	.0001***	.0406*	.2006

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

５）部員の状況については、チームの意欲、まとまりでは差は見られないが、不真面目さの要因では小中学校の方が高校よりもが不真面目でない。（図３－４、表３－４）

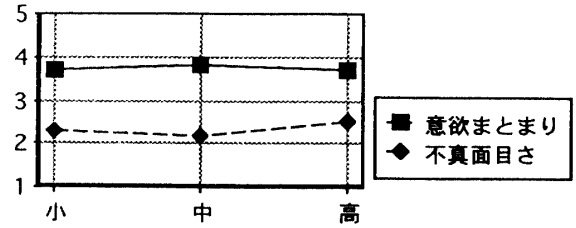

図３－４：校種別部員の状況

表３－４　校種間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：５％

	意欲まとまり	不真面目さ
小、中	.1777	.1232
中、高	.0764	<.0001***
高、小	.6775	.0144*

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

6）指導の言葉については、配慮の言葉では3.4～3.5の範囲にあり有意な差は見られない。指導の言葉は、中、小、高校の順に少なくなっている。（図３－５、表３－５）

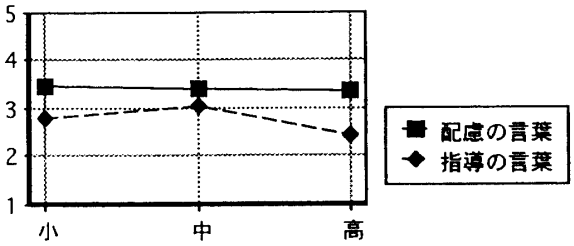

図３－５：校種別指導の言葉

表３－５　校種間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：５％

	配慮の言葉	指導の言葉
小、中	.4567	.0028**
中、高	.5908	<.0001***
高、小	.1880	<.0001***

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

中学校において、積極的な指導の姿勢が認められ、熱心な指導が行われている。

4、指導者自身の運動部の経験年数（中学１年～大学４年まで）と、２で得た各要因間との関係

A　バスケットボール部活動歴については、次のような傾向がある。

1）指導の現状については、経験年数の多い方ほど、積極性、充実感を感じており、不適合感および負担、困難感は少ない。（図４－１、表４－１）

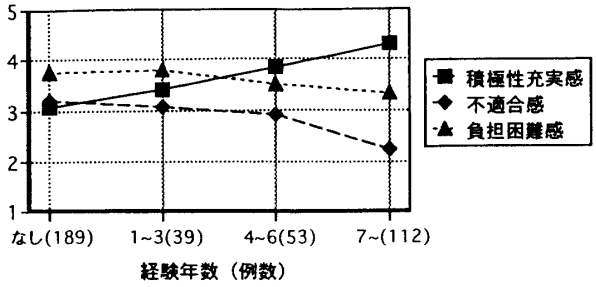

図４－１：バスケット経験と指導の現状

表４－１　バスケット経験年数間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：５％

	積極性充実感	不適合感	負担困難感
なし、1～3	.0300*	.4420	.8155
なし、4～6	<.0001***	.0550	.0749
なし、7以上	<.0001**	<.0001***	.0003***
1~3、4～6	.0462*	.4377	.1318
1~3、7以上	<.0001***	<.0001***	.0111*
4~6、7以上	.0034**	<.0002**	.3501

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

2）指導の技術については、経験年数の少ない方が知識不足を感じている。又、経験年数の多い方が研究熱心である。（図４－２、表４－２）

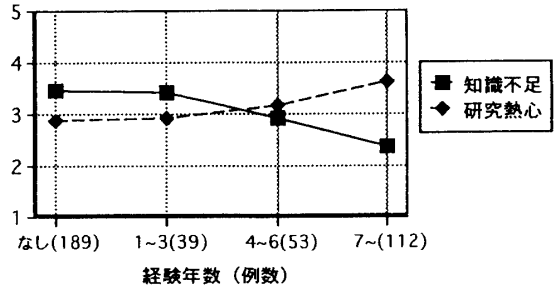

図４－２：バスケット経験と指導の技術

表４－２　バスケット経験年数間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：５％

	知識不足	研究熱心
なし、1～3	.9125	.8346
なし、4～6	.0015**	.0527
なし、7以上	<.0001***	<.0001***
1~3、4～6	.0244*	.2093
1~3、7以上	<.0001***	<.0001***
4~6、7以上	.0036**	.0040**

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

3）指導の環境については、学内、家庭については有意な差は見られないが、保護者の理解については７年以上のグループが、他のどのグループよりも有意に高い。

4）部員との関係については、信頼感と配慮性は、経験年数の多い方ほど高くなり、民主性はその逆の傾向を示している。（図4－3、表4－3）

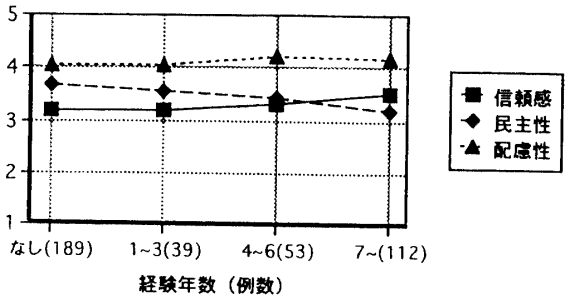

図4－3：バスケット経験と部員との関係

表4－3　バスケット経験年数間の有意差

FisherのPLSD　有意水準：5％

	信頼感	民主性	配慮性
なし、1~3	.9735	.3970	.9236
なし、4~6	.2250	.0204*	.0887
なし、7以上	<.0001***	<.0001***	.0902
1~3、4～6	.3566	.3099	.1819
1~3、7以上	.0065**	.0022**	.2387
4~6、7以上	.0604**	.0335*	.7069

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

5）部員の状況については、チームの意欲、まとまりでは7年以上のグループが他のグループに対して有意に高い。不真面目さは、7年以上のグループが、他のどのグループより真面目だと感じている。（図4－4、表4－4）

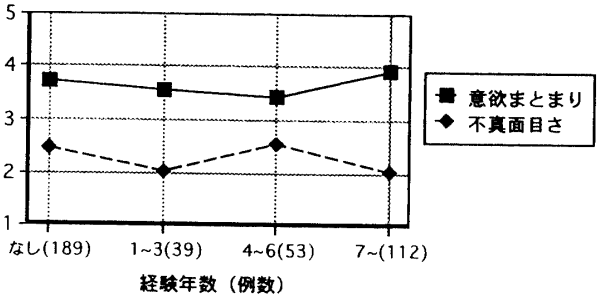

図4－4：バスケット経験と部員の状況

表4－4　バスケット経験年数間の有意差

FisherのPLSD　有意水準：5％

	意欲まとまり	不真面目さ
なし、1~3	.1610	.7061
なし、4~6	.0016**	.5727
なし、7以上	.0094**	<.0001***
1~3、4～6	.2308*	.9226
1~3、7以上	.0029**	.0002***
4~6、7以上	<.0001***	<.0001***

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

6）指導の言葉については、配慮の言葉では有意な差は見られない。経験の無いグループは指導の言葉がけが少ない。

B　運動部活動歴（バスケットボールと他の種目の経験年数の和）について、次のような傾向が認められた。

1）指導の現状については、経験年数のより多い方が積極性、充実感を感じ、不適合感が少なく特に7年以上のグループが他のどのグループよりも有意に高い。負担、困難感は有意な差は認められなかった。（図4－5、表4－5）

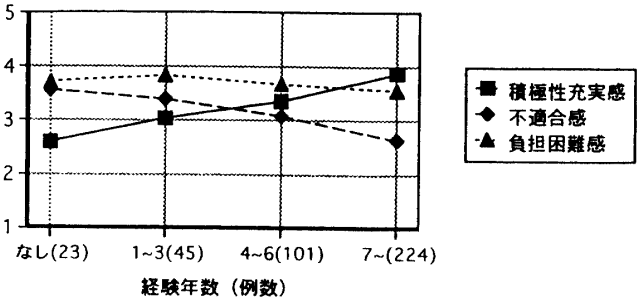

図4－5：バスケット運動部経験と指導の現状

表4－5　バスケット経験年数間の有意差

FisherのPLSD　有意水準：5％

	積極性充実感	不適合感	負担困難感
なし、1~3	.0961*	.6093	.6783
なし、4~6	.0013**	.0566	.8574
なし、7以上	<.0001***	.0001***	.3591
1~3、4～6	.0741	.0867	.4096
1~3、7以上	<.0001***	<.0010***	.0606
4~6、7以上	<.0001***	.0010**	.1841

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

2）指導の技術については、経験年数の少ない方が知識不足を感じ、経験年数の多い方が研究熱心である。7年以上のグループが、他のグループに対して有意に高かった。

3）指導の環境については、学内、保護者の理解が低い。

4）部員との関係については、信頼感と配慮性はは経験年数の多い方が高い、民主性は経験の無いグループが高かった。

5）部員の状況については、7年以上のグループが他のグループよりも、チームの意欲、まとまりで高く、不真面目さでは低かった。

6）指導の言葉については、配慮の言葉では有意な差は見られない。指導の言葉は7年以上のグループが他のグループよりも高い。

このように、指導者自身の部活動の経験は、部活動の指導場面に影響を及ぼしている。経験年数が多い方が、より積極性、充実感を持って指導しており不適応感が少ないことが認められた。部員の状況の項目についても、経験年数が多い指導者では、部員の意欲、まとまりがあり、部員は真面目に取り組んでいることが認められた。又、例数を比較してみるとバスケットボールの経験年数において、なし（189）、1～3年（39）、4～6年（53）、7年以上（112）である。経験者の中では、大学まで所属したものが多く専門性が高い指導者が多い。他の種目も含めた運動部の経験年数では、なし（23）、1～3年（45）、4～6年（101）、7年以上（224）という結果であり、運動部の経験者が多く、経験年数もより長い指導者が多い。さらに、7年以上つまり中学から大学まで継続して運動部に所属していた者が、より熱心な指導をしていた。

5、運動部顧問としての指導経験年数と、2で得た各要因間との関係を調べた。

A　バスケットボール部指導歴について、次のような傾向が認められた。

1）指導の現状については、指導年数の多い方が積極性、充実感を感じている。指導年数の多い方が不適合感および負担、困難感は少ない。（図5－1、表5－1）

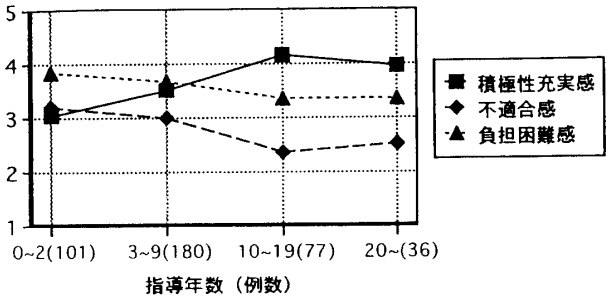

図5－1：バスケット指導歴と指導の現状

表5－1　バスケット指導間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：5％

	積極性充実感	不適合感	負担困難感
0~ 2, 3~ 9	.0002***	.1698	.1401
0~ 2,10~19	<.0001***	<.0001***	.0006***
0~ 2,20~	<.0001***	.0016**	.0081**
3~ 9,10~19	<.0001***	<.0001***	.0139*
3~ 9,20~	.0207*	.0149*	.0687
10~19,20~	.3033	.4605	.9876

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

2）指導の技術については、指導年数の少ない方が知識不足を感じている。又、指導年数の多い方が研究熱心であり、各々に有意差が認められる。（図5－2、表5－2）

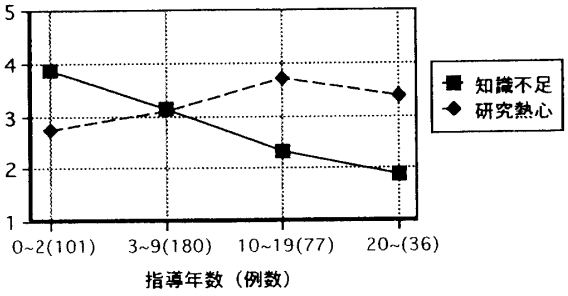

図5－2：バスケット指導歴と指導の環境

表5－2　バスケット指導間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：5％

	知識不足	研究熱心
0~ 2, 3~ 9	<.0001***	.0017**
0~ 2,10~19	<.0001***	<.0001***
0~ 2,20~	<.0001***	.0004***
3~ 9,10~19	<.0001***	<.0001***
3~ 9,20~	<.0001***	.0967
10~19,20~	.0335*	.0643

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

3）指導の環境については、差は見られない。

4）部員との関係については指導年数の多い方が信頼感、配慮性が高く、民主性は低い。（図５－３、表５－３）

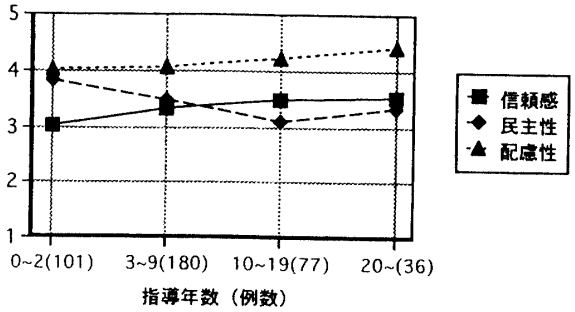

図５－３：バスケット指導歴と部員との関係

表５－３　バスケット指導間の有意差

FisherのPLSD　有意水準：５％

	信頼感	民主性	配慮性
0~ 2, 3~ 9	.0002***	.0001***	.6026
0~ 2,10~19	<.0001***	<.0001***	.0530
0~ 2,20~	<.0001***	.0002***	.0036**
3~ 9,10~19	.0329*	<.0001***	.0937
3~ 9,20~	.0647	.1888*	.0061**
10~19,20~	.8173	.0786	.1747

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

5）部員の状況については、指導年数の多い方が、部員の意欲、まとまりを感じている。不真面目さは指導年数の多い方が低い。

6）指導の言葉については、3年未満のグループが少ない傾向が認められる。

B　運動部指導歴（バスケットボールと他の種目の指導年数の和）について分析した結果、Aのバスケットボール部指導歴と同様の結果となった。

例数について、バスケットボール部指導歴では、3年未満（101）、3～9年（180）、9～19年（77）、20年以上（36）、総指導歴では、3年未満（44）、3～9年（167）、9～19年（127）、20年以上（56）となっている。この点を配慮すると、20年以上が例外的な結果を示しているものの、指導年数の多い方が、より意欲的な取り組みがみられ、子供たちも意欲的に取り組んでいる。

6、指導の技術的な部分についての指導者のタイプと、２で得た各要因間との関係を調べた。

1）指導の現状については、「解る－研究熱心」タイプは特に積極性、充実感を感じ、不適合感および負担、困難感は他のタイプよりも少ない。「解る－研究不熱心」タイプと、「解らない－研究熱心」タイプの間には、差はない。「解らない－研究不熱心」は、積極性、充実感が低く、不適合感および負担、困難感を感じている。（図６－１、表６－１）

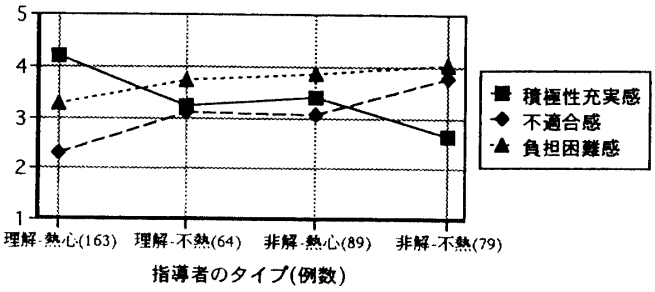

図６－１：指導者のタイプと指導の現状

表６－１　指導者の４つのタイプ間の有意差

FisherのPLSD　有意水準：５％

	積極性充実感	不適合感	負担困難感
理解-熱心,理解-不熱	<.0001***	<.0001***	.0011**
理解-熱心,非解-熱心	<.0001***	<.0001***	<.0001***
理解-不熱,非解-熱心	.2254	.8070	.3810
理解-熱心,非解-不熱	<.0001***	<.0001***	<.0001***
理解-不熱,非解-不熱	.0001***	<.0001***	.0402*
非解-不熱,非解-熱心	<.0001***	<.0001***	.1911

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

3）指導の環境については、「熱心」タイプは、学内、保護者の理解応援があると感じている。（図６－２、表６－２）

4）部員との関係については、信頼感と配慮性では、「解る－研究熱心」「解る－研究不熱心」「解らない－研究熱心」「解らない－研究不熱心」の順に低く、民主性ではその逆を示した。（図６－３、表６－３）

5）部員の状況については、チームの意欲、まとまりでは、「解る」タイプが、他のタイプ

より有意に高い。不真面目さでは、「熱心」な2タイプがより低い。
（図6－4、表6－4）

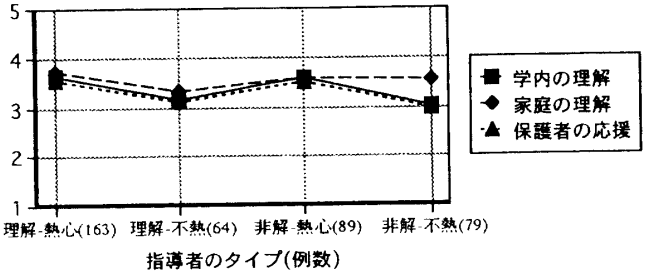

図6－2：指導者のタイプと指導の環境

表6－2　指導者の4つのタイプ間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：5％

	学内の理解	家庭の理解	保護者の応援
理解-熱心,理解-不熱	.0008***	.0084**	.0028**
理解-熱心,非解-熱心	.7788	.2560	.7016
理解-不熱,非解-熱心	.0051**	.1460	.0168*
理解-熱心,非解-不熱	<.0001***	.1606	<.0001***
理解-不熱,非解-不熱	.4519	.2427	.3623
非解-不熱,非解-熱心	.0002***	.7850	.0005***

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

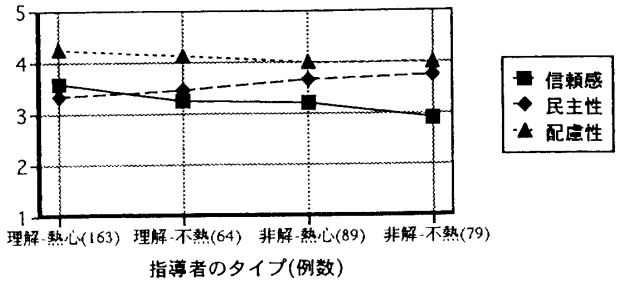

図6－3：指導者のタイプと部員との関係

表6－3　指導者の4つのタイプ間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：5％

	信頼感	民主性	配慮性
理解-熱心,理解-不熱	.0001***	.1564	.2225
理解-熱心,非解-熱心	<.0001***	.0003***	.0049**
理解-不熱,非解-熱心	.8429	.0926	.2396
理解-熱心,非解-不熱	<.0001***	<.0001***	.0136*
理解-不熱,非解-不熱	.0020**	.0261*	.3430
非解-不熱,非解-熱心	.0016**	.5253	.8291

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

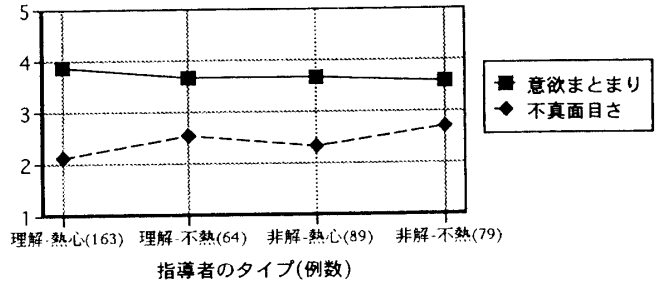

図6－4：指導者のタイプと部員の状況

表6－4　指導者の4つのタイプ間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：5％

	配慮の言葉	指導の言葉
理解-熱心,理解-不熱	.0180*	<.0001***
理解-熱心,非解-熱心	.0193*	.0095**
理解-不熱,非解-熱心	.8038	.1322
理解-熱心,非解-不熱	.0018**	<.0001***
理解-不熱,非解-不熱	.6250	.1317
非解-不熱,非解-熱心	.4273	.0013**

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

6）指導の言葉については、配慮の言葉では、有意差はあまり見られず、指導の言葉では、「熱心」なタイプが「不熱心」タイプより、有意に高い。（図6－5、表6－5）

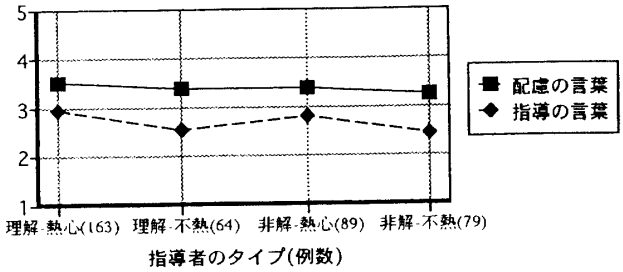

図6－5：指導者のタイプと指導の言葉

表6－5　指導者の4つのタイプ間の有意差

FisherのPLSD　　有意水準：5％

	配慮の言葉	指導の言葉
理解-熱心,理解-不熱	.1653	<.0001***
理解-熱心,非解-熱心	.1959	.0912
理解-不熱,非解-熱心	.8342	.0038**
理解-熱心,非解-不熱	.0178*	<.0001***
理解-不熱,非解-不熱	.4677	.4023
非解-不熱,非解-熱心	.3123	<.0001***

(*** P<0.001　** P<0.01　* P<0.05)

タイプ別の指導者においては、「解る－研究熱心」タイプが、他のタイプより、意欲的に取り組み、子供たちも意欲的に真面目に取り組み、周りからの理解を得ている。「解る」の中にバスケットボール部の経験および指導歴の長い者が含まれていると考えられるが、「解らない」つまり、バスケットボール部の経験および指導歴が少ない場合でも「研究熱心」であれば、「解る－研究不熱心」なタイプと比べて、大きな差はない。

ま　と　め

第一～三報の報告において、指導者自身の運動部の経験が、部活動指導に対する意欲的な取り組み方に影響することが認められた。本報告の小学校、中学校、高等学校の全体の分析において、同様の結果が得られ、自己の運動部の経験が指導の現状に少なからず反映されていると考えられるという先行研究に一致する。[6)7)] 小学校、中学校、高等学校を比較してみると、新潟県においては、中学校の指導の充実ぶりが認められる。これは、特に中学校の指導者は、バスケットボールの経験および運動部活動の経験が多年に渡る指導者が多いことによるものと考えられる。4つのタイプ別指導者についての結果からは、専門的な技術・知識があり研究熱心な場合は、最も指導者としての資質が高いといえるが、専門的な技術・知識がなくても研究熱心な場合は、専門的な技術・知識があるが研究不熱心な指導者に劣らない、又はより充実した指導状況にあるということがいえる。つまり、指導者の取り組む姿勢によって、子供たちとの信頼関係が成立し、子供たちの意欲的な活動を引き出し、指導者自身の充実感を産み出しているといえる。部活動指導の目標については、三者ともバスケットボールの楽しさがトップであったが、小学校では試合で勝利することは6番目であるのに対し、中、高校では2番目にあげられている。発育段階の差による目標の捉え方の違いによることと、専門性の高い（競技歴の長い）指導者が中、高校に多いことによるものと考えられる。子供達にバスケットボールの楽しさを経験させる部活動は、指導者自身が充実し共に喜びを分かち合える場であると思われるが、部活動指導現場では、指導者の専門性に関わらず、充実感とともに負担、困難感が同居していることが研究結果に現れている。特に、指導に不適合感を感じる指導者（バスケット経験、指導経験の少ない）にとって、負担、困難感は、基本的な指導技術の知識が乏しいことに、一因があるものと思われる。しかし、指導の技術の面で、解るタイプ（専門性の高い）は、より研究熱心であり、解らないタイプは熱心さで劣っていた。様々な講習会、研修会の場が提供されているものの、専門性の高い指導者を対象にした研修の場が多いのが現状である。特に経験の少ない、指導に困難を感じている指導者にとって解りやすく、日々の指導に役立つような指導技術、指導方法の研修の場の提供が必要ではないかと考えられる。新潟県は全国でもトップで活躍するチーム、プレイヤーが育っているが、チャンピオンを育てたようなトップレベルのコーチの指導法とは別に、部活動指導の困難な底辺部において、小中高校の現場で熱心な指導を実施している顧問による研修会や、合同練習会などの機会を設けることが望まれる。

（資料１）

平成10年度学校体育調査結果（高等学校については公立全日制本校のみ）

１．活動状況

	小学校	中学校	高等学校
学校数	643	250	101
学級数	6,065	2,721	1,890
運動部数（男女別部数）	1,680	2,719	1,408
児童（４年生以上）、生徒数 A	81,150	89,075	70,464
運動部加入数 B	42,059	66,750	29,167
運動部加入率 B／A	51,8%	74.9%	41.4%
教員数 C	9,385	5,504	4,885
運動部指導者数 D	4,044	3,658	3,465
運動部指導率 D／C	43,1%	66.5%	70.7%
外部指導者数	473	380	119

２．種目別活動状況

〈小学校〉

	部数		部員数		顧問数	
	男子	女子	男子	女子	男性	女性
陸上競技	371	370	3,650	2,936	337	270
水泳	360	359	2,265	2,503	251	263
バスケットボール	219	275	4,184	5,358	454	327
サッカー	84	31	2,521	43	167	67
軟式野球	151	49	4,591	47	276	84
体操競技	0	0	0	0	0	0
バレーボール	1	5	31	119	5	8
卓球	8	7	123	36	6	8
バドミントン	4	4	16	10	1	2
ソフトボール	3	6	0	99	5	6
柔道	0	0	0	0	0	0
剣道	2	2	28	7	0	0
相撲	7	7	74	0	17	10
スキー	138	138	719	524	100	86
体育	260	260	6,413	5,633	606	674
その他	6	7	85	44	6	8
合計	1,614	1,520	24,700	17,359	2,231	1813
総計	3,134		42,059		4,044	

〈中学校〉

	部数		部員数		顧問数	
	男子	女子	男子	女子	男性	女性
陸上競技	178	177	4,841	3,080	243	115
水泳	69	69	651	630	82	44
バスケットボール	172	120	5,778	2,780	316	117
サッカー	110	2	4,422	22	175	13
ハンドボール	1	0	34	0	1	1
軟式野球	232	2	8,582	2	398	20
体操競技	21	36	196	654	22	40
新体操	1	20	0	464	4	26
バレーボール	51	228	1,204	6,633	279	203
ソフトテニス	112	173	3,530	5,489	236	199
卓球	213	190	6,034	3,597	283	235
バドミントン	16	52	463	1,854	44	53
ソフトボール	0	27	0	615	32	15
柔道	83	56	1,359	339	115	17
剣道	123	117	1,701	1,130	152	68
相撲	2	0	15	0	3	0
スキー	32	30	402	176	89	14
その他	3	1	63	10	4	0
合計	1,419	1,300	39,275	27,475	2,478	1180
総計	2,719		66,750		3,658	

〈高等学校〉

	部数		運動部数	部員数		顧問数	
	男子	女子		男子	女子	男性	女性
陸上競技	95	90	101	1,515	921	218	55
体操競技	21	24	28	79	143	34	18
新体操	0	4	4	0	25	1	6
水泳	37	32	40	233	247	72	22
スキー	27	22	29	235	144	101	12
バレーボール男子	75		75	1,056	115	126	23
バレーボール女子		87	87		1,708	108	51
バスケットボール男子	95		95	2,372	170	172	27
バスケットボール女子		75	75		1,358	87	48
ソフトテニス	61	70	77	674	966	156	62
卓球	83	72	89	975	466	170	58
バドミントン	80	79	87	1,173	1,385	190	60
サッカー	87	2	87	2,871	315	209	10
ラグビー	14	0	14	247	30	29	2
ソフトボール	3	24	25	36	378	47	14
柔道	76	42	77	592	148	161	13
剣道	73	68	80	528	416	145	38
相撲	3	0	3	21	3	7	0
レスリング	3	0	3	45	0	6	1
登山	46	24	49	420	130	131	11
ダンス	5	17	17	11	449	10	26
ハンドボール	7	6	7	130	89	16	5
テニス	52	55	62	882	888	130	41
ホッケー	3	3	4	44	55	9	3
フェンシング	1	1	1	19	22	3	0
弓道	22	21	23	422	435	43	17
ウェイトリフティング	4	1	4	31	2	6	2
漕艇	5	5	6	44	31	13	1
自転車競技	2	1	2	29	1	5	0
空手道	33	25	34	332	170	62	7
ボクシング	8	0	8	110	15	15	1
少林寺拳法	9	8	10	78	94	16	5
野球	93	0	93	2,181	322	271	23
軟式野球	4	0	4	63	16	0	1
なぎなた	0	0	0	0	0	0	0
その他	7	6	8	42	20	13	5
計	1,134	864	1,408	17,490	11,677	2,788	668
合計	1,998		1,408	29,167		3,456	

（資料２）

バスケットボール部顧問の先生・コーチへ〈質問用紙〉

新潟青陵女子短期大学　講師　高　山　千　代

A　下の１～９について、お答え下さい。

１．性別（男・女）　２．年齢（　　才）　３．未婚・既婚
４．担当教科（　　）　５．担任（無・有　　年　組）
６．部の性別（男子部・女子部）
７．現在の部員数（男子　１年生　　人、２年生　　人、３年生　　人）
（女子　１年生　　人、２年生　　人、３年生　　人）
８．今までに指導された種目と期間（今年も１年として）
種目　バスケットボール　　（　　年）
その他の種目
・　　（　　年）　・　　（　　年）
・　　（　　年）　・　　（　　年）
９．ご自身の中学・高校・大学時の部活動の経験
中 学 校　種目　　・　　年間
高等学校　種目　　・　　年間
大　　学　種目　　・　　年間
10．一週間にどれ位、部活動の指導をしますか（　　時間／日・　　回／７日）
一週間にどれ位、練習しますか　（　　時間／日・　　回／７日）
日曜日は月に何回位、練習しますか　（　　回／月）
年に何回位、練習試合をしますか　（　　回／年）

B　練習内容について、答えて下さい。

１．普段よく実施している内容をあげてください。
（例　フットワーク・ドリブルシュート・三角パス・２：１速攻・５：５ゲーム等）

２．特に大切に指導していることがありますか、あればあげてください。

３．指導にでられない時、どのように対処していますか。

４．試合前に特別実施することがありますか、あればあげてください。

５．レギュラー、非レギュラーの扱いの違いがあればあげてください。

C　部活動の目標について、下記の項目の中で重視しているものを３つ選び、重視している順に１～３の番号をいれて下さい。

・試合での勝利（　　）　・バスケットの楽しさの経験（　　）　・仲間づくり（　　）
・精神力を養う（　　）　・チーム内の役割分担や協力（　　）　・体力の向上（　　）
・社会性を養う（　　）　・個々の技能の向上　（　　）

下記の質問について、あなたが部活動の指導に携わっている上で、日頃感じていることをお答え下さい。答え方は5～1の程度（5…あてはまる、4…ややあてはまる、3…どちらともいえない、2…あまりあてはまらない、1…あてはまらない）の中で、適当な数字1つの○をつけて下さい。

部活動指導の現状について

1．部活動の指導は楽しい　5－4－3－2－1
2．希望して顧問になった　5－4－3－2－1
3．顧問を辞めたいと思うことがある　5－4－3－2－1
4．時間的に負担である　5－4－3－2－1
5．部の指導に向いていないと思う　5－4－3－2－1
6．指導する事に充実感を持っている　5－4－3－2－1
7．部活動の指導に困難さを感じる

指導の技術的な部分について

8．指導方法をもっと知りたい
9．どんな練習をすればよいか解らない　5－4－3－2－1
10．審判方法がよく解らない　5－4－3－2－1
11．バスケットボールの本などをよく読む　5－4－3－2－1
12．指導者講習会によく参加する　5－4－3－2－1
13．他の学校の顧問とよく話をする　5－4－3－2－1
14．常に練習内容に工夫している　5－4－3－2－1
15．試合のビデオを撮影し指導に利用する　5－4－3－2－1

指導の環境について

16．他の先生方は協力的だ　5－4－3－2－1
17．校長・教頭は協力的だ　5－4－3－2－1
18．家庭の理解がある（ご自身の）　5－4－3－2－1
19．家庭で不満を言われる　5－4－3－2－1
20．保護者がよく応援にくる　5－4－3－2－1
21．保護者の期待が大きい　5－4－3－2－1
22．保護者は協力的だ　5－4－3－2－1

あなたと部員との関係について

23．子供たちは私の言うことを素直に聞く　5－4－3－2－1
24．私は子供たちに信頼されている　5－4－3－2－1
25．私は子供たちに好かれている　5－4－3－2－1
26．私は子供たちに恐がられている　5－4－3－2－1
27．私は子供たちによく相談を持ちかけられる　5－4－3－2－1
28．私は子供たちの期待に応えていないと思う　5－4－3－2－1
29．私は子供たちの意見をよく聞く　5－4－3－2－1
30．キャプテンは部員で相談して決める　5－4－3－2－1
31．練習内容について部員の意見を聞く　5－4－3－2－1
32．私は全員が平等に練習できるようにしている　5－4－3－2－1

部員の状況について

34. 子供たちには仲間意識を持っている　5－4－3－2－1
35. 子供たちは楽しく練習している　5－4－3－2－1
36. 子供たちはなかなか上達しない　5－4－3－2－1
37. 子供たちは心身ともに逞しくなってきている　5－4－3－2－1
38. 子供たちにはやるが気がない　5－4－3－2－1
39. 子供たちは練習を無断でよく休む　5－4－3－2－1
40. 子供たちは競争意識を持っている　5－4－3－2－1
41. 子供たちは互いに注意しあっている　5－4－3－2－1
42. 子供たちは練習中ふざけていることが多い　5－4－3－2－1
43. 子供たちだけでも普段通り練習できている　5－4－3－2－1
44. レギュラー以外の子供たちも意欲的に参加している　5－4－3－2－1
45. 子供たちは試合に勝ちたいと思っている　5－4－3－2－1

指導中の言葉がけについて

46. ほめる言葉が多い　5－4－3－2－1
47. 技術的な指導の言葉が多い　5－4－3－2－1
48. しかる言葉が多い　5－4－3－2－1
49. 叱咤激励の言葉が多い　5－4－3－2－1
50. なじる言葉が多い　5－4－3－2－1
51. 結果の善し悪しの言葉が多い　5－4－3－2－1
52. 雰囲気を盛り上げる言葉が多い　5－4－3－2－1

部活動をやめていく子供たちについて、退部の主な理由を多い順にあげて下さい。

1
2
3
4
5

ご協力有難うございました。
尚、何かご意見がございましたら、お聞かせ下さい

＜引用・参考文献＞

1）高山千代、「運動部活動指導者の現状と問題点（高等学校）」新潟青陵女子短期大学研究報告第27号、pp93－105、1997.
2）高山千代、「運動部活動指導者の現状と問題点（小学校）」新潟青陵女子短期大学研究報告第28号、pp107－117、1998.
3）高山千代、「運動部活動指導者の現状と問題点（中学校）」新潟青陵女子短期大学研究報告第29号、pp85－97、1999.
4）新潟県バスケットボール協会編、「新潟県バスケットボール協会年報（第２7号）」新潟県バスケットボール協会、1999.
5）新潟県教育庁保健体育課、「新潟県の学校体育」新潟県教育庁保健体育課、1999.
6）粂野　豊、他「現代社会とスポーツ」不昧堂、1984.
7）体育社会学研究会編「体育とスポーツ集団の社会学」道和書院、pp135－158、1974.
8）体育社会学研究会編「体育・スポーツ指導者の現状と課題」道和書院、1974.
9）体育・スポーツ社会学研究会編「体育・スポーツ社会学研究２」道和書院、1983.
10）佐伯聰夫、他「現代社会スポーツの社会学」不昧堂、1984.
11）体育・スポーツ社会学研究会編「子供のスポーツを考える」道和書院、1987.
12）城丸　章夫、水内　宏編「スポーツ部活はいま」青木書店、1991.